
電腦遊戲

ユユキ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳遊戯

【Nコード】

N8838Z

【作者名】

ユユキ

【あらすじ】

ツイッター、ブログには疎いので、代わりに宣伝してくれると幸いです。

かなりの長編になる予定。長い目で見てください。

プロローグ（上）

設定は近未来。この世界は魔法少女に支配されている。と、言ったらラブコメを彷彿とさせるが、むしろ逆だ。

ラブもコメディもない。陰か陽で言えば、陰。シリアスな世界だ。少なくとも人が死ねるくらいには。

霞「探偵さん」

年甲斐もなくかわいらしい、聞き慣れた声が扉越しに響く。ここは俺（優）の探偵事務所（木造）だ。

と、言っても事件などを取り扱ったことはない。どちらかというと何でも屋だ。

霞「優ちゃん」

霞、三十代の女性。ちなみに俺は二十歳。

どっちにとっても痛いので、嫌々ドアを開けることにした。ちなみに俺はツンデレではない。

優「頑張り過ぎだろ、おばあちゃん」

霞「熟女萌えっていいよね」

優「少なくとも、俺は遠慮する」

とりあえず、いつもの定位置に座る。ちなみに霞とは何の過去もない。

出会って随分経つが会話しかしていない。一応、依頼主のはずなんだが。

霞「今日は初依頼よ」

優「さっそく、地の文に反したな」

霞「私はそういう女よ」

ここは軽く流すことにする。

優「よし、本題入るか」

霞「釣れないのね。まあ、いいわ。桜」

扉が再び開き、俺と同年くらいの女性が入ってきた。

優「いたなら一緒に入ればよかったんじゃないか？」

桜「なんか恥ずかしいだろ」

霞「人見知りなのよ」

優「初対面だけど、絶対違うと思う」

桜はそのまま霞の隣の席に着く。

桜「人見知り萌え失敗だな」

霞「さすがに無理があつたわね、キャラ的に」

優「マジ、本題入ろう」

桜「弁天倒すぞ、弁天」

弁天、初代魔法少女。もちろん女性。ちなみにそういうイレギュラーは今のところない。魔法少女はみんな女性だ。電脳技術、魔法の開発者とも言われている。この情報は探偵として微妙と判断するが、
優「そこでなぜ俺なんだ？」

霞「あら、鈍いわね。魔法は言葉の力。読解力。探偵にぴったんじゃない」

優「人殺しはぴったりじゃないけどな」

霞「優しいのね」

桜「優だけにだな」

ここは流すことにしよう。

優「ちなみに目的は？」

桜「このままだとプー太郎ということに気付いてな」

霞「それはいいことね。よくやったわ」

優「いや、知らねえよ」

霞「あら、他人事じゃないでしょ。この辺りではお人好しで好かれてるみたいだけど」

優「まあ、正直痛いところだな」

桜「で、プー仲間を誘いに来たわけだ。世界に干渉出来ないのは寂しいだろ？」

優「確かに暇だな」

霞「もう行くしかないっしょ」

優「人殺しにか？」

桜「楽しいぞ、世界に触れるのは。そうっだな、おまえが付いて来れば、止められるかもしれないだろ？」

霞「それを言われたら行くしかないよね」

優「そうだな」

霞「さすがお人好し」

優「褒め言葉にしておくよ」

霞「あら、褒めてるのよ」

優「それはどうも」

桜「じゃ、行くか」

その時、天井の扉が開き梯子が下りてきた。いわゆる天井裏というやつだ。

エンデ「やつたるばい」

天井裏に潜んでいたのは見た目十二歳程の少女。そう潜んでいた。住まわした覚えはない。

ちなみに付き合いは霞より少し長い。

霞「出たわね妹」

桜「そう言えば似ているな」

優「分な。そういうことでおまえの目はおそらく腐っている」

桜「マジで、眼科行くか」

エンデ「男のツンデレは見苦しいで、兄ちゃん」

優「おい、ダンどこだ」

天井裏からさらに見た目三十代くらいの男性が降りてくる。見た目は若いが実年齢はそれ以上だろう。

なんたつて、エンデのおじいちゃんだからな。その年上を呼び捨てにするのは、友達ということだ。

親しき仲に礼儀はいらない。と、少なくとも俺は思う。それじゃ寂しいからな。

ダン「おう、ここだ」

優「おまえもそこかよ。画的にシニールだな」

ダン「正直、泣きそうだよ」

エンデ「冗談きついわ、じいちゃん」

ダン「冗談だとよかったんだがな」

エンデ「なんでやねん」

ダン「そうらしい。もう妹にしてくれると俺もありがたいよ」

霞「その心配はもうないわ。このメンバーで住むことになるから」

優「それこそ、なんでやねん、だな」

ちなみに住宅区画はなくワンフロアだ。広さはまあ、十分だが。

霞「いいでしょ？」

優「まあ、いいけど」

ダン「相変わらず、霞には弱いみたいだな」

優「嫌な、おばあちゃんだよ」

ダン「腐れ縁だな」

優「おまえらもな」

エンデ「これで正式に妹やな、兄ちゃん」

優「もうそれでいいよ」

桜「妹萌えか。王道だな」

優「もうそれでいいよ」

エンデ「よし、話戻して、やったるばい」

優「おまえとダンは留守番な」

エンデ「妹に待っててほしいってやつやな」

優「もうそれでいいよ」

と、いうことで俺と霞、桜は弁天の元に行くことになった。

プロローグ（中）

弁天の居場所は「白夢」という電腦空間だ。

電腦空間だが別次元にあるわけではない。

場所は日本列島の一部。

なぜ電腦空間と言われているかというところ、その一帯の粒子が電腦化しているからだ。

よって、その能力があれば自由に空間を創り変えることができる。

そこにあつたものの全てを白紙にして。まさに夢の世界というわけだ。そして弁天は和を重んじるようだ。

今俺達がいるのは少し大きめの鳥居の前。その先には横にただ広い神社がある。無論、ここにこんな場所はなかった。どこかの街だつたはずだ。住人がどうなつたかは、想像通りだろう。周りに人の気はないが、少し離れた所には廃ビルなどの街の名残がある。

街のと真ん中に馬鹿でかい神社があることになる。

さて、話を戻すと。鳥居の前には一人の女性がいる。俺と同年くらいだろう。弁天には会つたことはないが、おそらく違う人だ。

桜「よう、せっちゃん」

セツナ「その人が霞の言っていた人ね。桜は誰とでも合う性格じゃないけど、問題なかったみたいね。

それはそれで、ちよつと複雑だけど」

桜「百合萌えだな」

優「もう何萌えでもいいよ」

霞「ちなみにせっちゃんは、あの歌姫なのよ。すごいでしょ」

優「それは、まあ、すごいな」

歌姫。声だけの歌手。初めはネット配信だけだったが、今やあらゆるメディアに精通している。

老若男女、知らない者はいないだろう。ここまできたら、もはや前

例がない程だ。生きながらに、教科書に載る程の偉人となつたくらいだろう。

霞「反応薄ーい、つまんない」

優「その歳でそういうしゃべり方は痛いと思うぞ」

霞「まだまだ甘いわね。痛さの中に萌えがあるのよ」

優「おまえらはどれだけ萌えを押すんだ」

セツナ「とにかく、私の事は気にせずに、どうぞ」

鳥居の正面に立っていたセツナはそう言つて道をあける。

優「護っていた風だったが、いいのか？」

セツナ「気にせずどうぞ」

優「めちゃくちゃ気になるんだが」

桜「いわゆる探偵心というやつか？」

優「いや、普通に。歌姫ならなおのことな」

セツナ「それはとりあえず、弁天に会ってからでもいいと思うよ」

優「そこまで言うなら、そうするか」

桜「よし、行くか。ああ、戦闘は私がやるから」

優「俺は読解というわけか」

桜「そうだな、一人でしか戦つたことなかったし、そうさせてもらおうか」

優「霞はどうするんだ？」

霞「見物」

優「ああ、そう」

プロローグ(下)

神社をバックに立っているのは見た目二十代前半の女性。俺と桜より少し年上に見える。

道は石畳で出来ていて、建物だけでなく周りも神社のそれだ。

広さは左右の端が見えない程には広いようだ。今この場には4人いるわけだが、暴れても窮屈はしない。

弁天「ふむ。まさかおまえが仲間を連れてくるとはな」

桜「別に人見知りでも、孤独を愛しているわけでもないからな」
優「やっぱり人見知りじゃなかったんだな」

声を聞いてはつきりしたが、弁天と桜は雰囲気似ているようだ。

弁天「今は語ることもあるまい。さつさと始めようか」

台詞の味気なさとは裏腹に声は嬉しそうだ。結構ノリノリらしい。

桜「ああ、その前に」

桜は俺の目の前の空中に繋という文字を出現させる。これが魔法少女の魔法というやつだ。

この文字に触れると効果を発揮する。ちなみに魔法というだけあって魔法少女にしか使えない。

さらに言うと、電腦技術の一種なので厳密には科学だ。それでも魔法少女にしか使えないが。

その理由はちゃんとある。魔法少女がそう呼ばれる基準は、魔法少女ゲノムがあるかどうかということで決まる。つまり遺伝子が違う。差別的な言い方になるが人間じゃないということだ。結果、人間には使えない技術ということになる。

桜「これで一度だけ私に魔法を伝えることができる」

優「俺は読解を口にすればいいわけだな」

桜「なんだ、知ってるのか」

優「一応、妹分が魔法少女だからな」

桜「それは、萌えるな」

優「要素だけはな」

俺は中空の繋に触れる。こちらに変化はないようだ。

桜「よし、いいぞ」

桜はどこからともかく一振りの刀を出現させる。この技術なら、データチップ（大きさは一センチの正方形）があればこちらでも使える。とはいえ、桜はそういう物を持っていなかったようなので魔法の一種なのだろう。ちなみにデータチップの仕組みは、内臓されている電脳粒子が周りの原子に作用し物質を創りだす。データチップにあるかじめインプットされたものを、何も無い空間に出現させるということだ。

桜は弁天に向けて刀を構える。こちらでも弁天に劣らずノリノリのようだ。二人とも、戦闘狂ということらしい。おそらく喧嘩レベルではなく、殺し合いの。

桜「では、推して参る」

桜の顔は笑っている。邪念のない純粹な笑みだ。無垢と言ってもいいだろう。

桜と弁天を結ぶ直線の中空に加と狩の文字が浮かぶ。加は加速、狩は攻撃系の何かだろう。

桜はそれを潜り、弁天との距離を一気に詰める。

それに対し、弁天は無数の無で応戦する。

桜は中空に描かれる無を難なく避けるが、さすがに射程圏には入れないようだ。

優「このままいけば、魔力切れでこっちの勝ちか」

霞「このままいけばね」

優「いらないか」

霞「読解がんばってね」

ちなみに魔力とはそのまま魔法を使う燃料みたいなもの。ゲームよろしく、それがなくなれば魔法は使えない。何もないところからといって、元は必要だ。

優「それにしても楽しそうだな、どっちも」

霞「世界に触れるとはこういうことね」

優「確かに、ここまで深く関わること自体ないだろうからな」

「なんたつて、殺し合う程だからな。戦争でも大義名分や防衛の理由ぐらいはつく。」

優「まあ、殺し合いを除けばいいことではあるな」

霞「でもこういうのって、一般的には引かれるよね」

優「そう考えると、以外にみんな人見知りだな」

霞「それじゃ、友達百人つくれないわね」

優「一応はつくれるみたいだけどな」

霞「名前だけは寂しいわよ」

優「そうだな」

霞「これ、ただの雑談ね」

優「そうだな。読解するか」

そのタイミングで、桜がこちらに戻ってきた。その過程で刀を無に向けて投げる。刀は無かったことにされたかのように何の痕跡もなく消滅する。

弁天は無を展開したまま元いた場所にいる。何気に一步も動いていないようだ。まだ余裕ということか。

優「あれは触れたら終わりだな」

桜「どんな攻撃でもそうだな。拳で殴るわけでもあるまいし。あれも急所を外せば治癒魔法でなんとかなる」

そこは殺し合いの重みということだろう。

桜は刀を再び出現させ、構える。

桜「いけるか？」

優「いけなくても、いくんだろ？」

桜「当然」

桜は弁天に向かって走り出す。

霞「相性はいいいみたいね」

優「単純だからな」

霞「そういえば、妹ちゃんも単純ね」

桜の体に無が触れる。無くされたのは加速の力だ。

霞「で、どうするの？バリバリ殺そうとしているわけだけど」

優「それが世界に触れるということなら受け入れるよ」

霞「首を突っ込むなら、殊勝な判断ね」

優「突っ込ませたのはおまえだけどな」

霞「テヘ」

優「歳、考えろよ」

霞「いけると思うけどなー、熟女萌え」

さらに無が触れる。次はもちろん狩。これでいよいよということになる。

霞「ここからが桜の真骨頂。いろいろな意味でね」

桜の肩に無が掠る。それだけで桜の腕が千切れる。

桜は切断面に癒を出現させる。癒着の癒、これが治癒魔法ということになる。千切れた腕は地面に着かず、切断面に吸い寄せられるように癒着する。治癒魔法といっても癒着だ、画はかなり生々しい。

致命傷を避けながら、桜はどんどん距離を詰めていく。地面を血飛沫で染め上げながら。

優「大丈夫か？あれ」

霞「顔は笑っているからね」

優「真骨頂か」

霞「貧血は確実だろうけど」

優「とんだ元氣娘だな。じゃあ、さっさと締めるか」

桜は遂に弁天を射程圏に捉える。

それに対し弁天は自分に無を触れさせる。大きさは人一人分だ。一瞬で、桜の目の前には無の文字しか無くなる。

そして無はさらに大きさを増しながら、横回転を始める。

攻撃態勢に入っていた桜は何とかバックステップで回避するが、右手と右手の刀を持っていかれる。

しかも切り離された手足および刀はがつつり無の回転に巻き込まれ

たので、そのまま消滅してしまう。
さすがにこれでは、癒着はできない。

優「無はすべてを無に帰す、有はそれを有に戻す」

俺はそう呪文を唱える。すると桜の切断面に有の文字が描かれ、右手足と刀が再生する。

霞「さすが探偵、名推理ね」

優「自分を消したのが逆に決め手になったな。それより、何気にやばくなかったか」

霞「あの子もそこまで馬鹿じゃないわよ。ま、それ程信じていたということかな」

優「本当かよ」

霞「本当、本当」

優「それは素直に嬉しいな」

桜は即座に体勢を立て直す。無は回転を止めている。

桜は目の前の中空に有と狩を出現させ潜る。

無は試すように桜を迎え入れる。

桜は上部分を刀で横一閃する。

無が消え代わりに出てきたのは、首を切り落とされた弁天だ。

地面に落ちた頭に続くように、残りの体も仰向けに倒れる。

が、間もなく桜の目の前に弁と天の文字が縦に熟語として現われる。すると地面の死体が薄れていき、代わりに新しい体が足から形成されていく。

結果、弁天は見事に蘇った。

桜「弁天は天命を変える。

不動はそれを動かさない」

桜はそう唱え、不動の文字を潜る

そして弁天の文字の方に刀を振り下ろす。

が、刀は弾かれ、その力で桜は地面を転がりながら後方に大きく吹き飛ばされた。

ちょうど並んで立っていた優と霞の足元に当たり、その動きを止め

る。

ちなみにこれは解読を間違えた時に起こる現象だ。刀ごと弾かれたということになる。

霞「お帰りー」

桜「おう」

桜は勢い良く立ち上がる。それほど応えてはいなかったようだ。

弁天は完全に再生している。ちなみに死体は完全に消えたようだ。

弁天「ふむ。組んだ程度の実力はだせたというところか」

桜「前は無までだったからな」

弁天「今回はここまでにしておくか？」

桜「いや、まだまだ」

俺つい桜の後頭部を叩き、突っ込んでしまった。ちなみに言い終わると同時。タイムラグはない。

優「まあ、帰るぞ」

桜「まあ、帰るか」

弁天「まあ、おまえがここで死ねば、それこそセツナの痔命が縮むというものだ。いや、縮みはしないか」

優「そういう話だったのか？」

桜「そう単純な話じゃないさ。その辺りは後々だな」

霞「じゃ、これでお開きということだ」

優「微妙な締め言葉だな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8838z/>

電腦遊戲

2012年1月5日20時53分発行